慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人種問題の本質
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1944
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.3・4 (1944. 4) ,p.165(1)- 199(35)
JaLC DOI	10.14991/001.19440401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學教授　高橋誠一郎著

古版西洋經濟書解題

高橋教授の王城山莊は稀覯の經濟書の富を以て夙に著名である。大英博物館或は牛津大學ボッドリイ文庫に於てすら一本を藏するのみにして最稀と記されあるものが、事もなげに教授の机上に置かるゝを見るも稀としないのである。西暦一五八一年版の一匿名人著「種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる檢討」より一八四八年版ジョン・グレイ著「貨幣の本質及效用に關する講義」に至る三十五篇、年代は三百五十年間に亘り、收輯せられたるものは概ね天下の孤本にして而も悉くこれ經濟學史上重要なる一基石たり或は興味少しとせざる問題を提出する學界の珠玉である。之等初期國民經濟時代より、講壇社會主義或は歴史學派の先驅的著作に至る古書群は、玆に教授の周到稠密なる解題を施されて再び世に現れた。皇國獨自の經濟學體系の樹立せられんとしつゝある今日、最も有力なる參考資料たるを信ずるものである。

A5　七三〇頁
價八圓四〇錢
送料　四五錢

東京都芝區三田二ノ一　慶應出版社　電話三田(45)二七九一　振替東京一五八一八〇

三田學會雜誌　第三十八卷　第三・四合併號

人種問題の本質

加田哲二

一　人種・民種問題の意味

人種の概念は、人類集團の身體的遺傳の類似性によつて得られる自然科學的なものである。皮膚の色彩・頭蓋形狀・鼻型・毛髪形態などの區別標識によつて、人類の大體を分類したものが人種である。その人種は、同じ身體的遺傳標識によつて、更に細分される。わたくしは、それを民種と呼んでゐる。この區別を基礎に置いて、これに歴史的社會的區別標識を與へたものが、民族である。人種・民種は、自然的なものであり、民族は歴史的社會的なものである。

こゝに問題とするのは、人種に關するものである。人種が、いかにして區別されるかは、他の機會において論及してゐるから、こゝでは、それについて論じない。一般に人種問題といはれてゐるものは、なにかが、こゝでの課題である。この問題は一見容易のやうであつて、しかも困難である。その理由は、自然的現象としての人種が、決

して自然現象として客觀的に受取られてゐないからである。そこには、第一に人種的差別による感情が存在してゐる。このことは、事實であつて、異質者に對する深い差別感に根ざしてゐる。第二には、この差別感情は、往々にして、政治經濟的目的のために、利用されてゐる。殊に排他的民族主義、煽情的好戰主義の立場にあるものは、この感情を利用することによつて、一般の行動を刺戟しようとする。從つて、自然現象としての人種は、客觀的現象として觀察されないで、著しく主觀的色彩をもつて、著色される傾向がある。

人種・民族の問題であつて、比較的客觀的に觀察し得るものは、第一、人種の自然的特徴、第二人種の分布・人口であらう。人種の自然的特徴は、皮膚の色彩・毛髮形狀・鼻型・頭蓋形狀などの計量可能の區別標識を用ゆるからである。しかしながら、この計量可能の區別標識も、數種の人種・民種に對して、重複部分がある。皮膚の色彩をもつていへば、中間色彩ともいふべきものがあり、鼻型をもつていへば、狹鼻・廣鼻・中鼻の中間的なものがあり、數種の區別標識を採用する場合においては、それぞれの中間的なものゝ存在によつて、人種所屬決定に論議を生ずる場合がある。かゝる客觀的標識の設定によつても、困難の存するのに加へて、人種の精神的資質の點などを考慮に入れるとすれば、一層の困難を增加する。この點について、最も戒心を加へなければならないのは、「血」の問題である。人種・民種が問題となる場合の「血」は客觀的物質として理解されるのであるか、また一種の靈的作用を持つものとして理解されるのであるかが明瞭でない。醫學者によつて用ゐられる血液型A・B・AB・O型の四種は、純粹な物質としての血液の分析である。しかるに、これらの血液型と氣質または精神の傾向とを結合せしめる場合があり、それが著しく實證的でないことがある。かくのごときは、混亂惹起の原因をなすのであるが、往々にして行はれてゐるところである。從つて、人種の自然的特徴は、可量的標識をもつて表現しなければならない。

第二の人種の分布・人口に關しては、第一の人種の區別標識の確定によつて、明瞭となるのであるが、諸種の人種または民種が混住し、その間に複雜な混血關係が存する場合には、判定並に計量が困難となる。しかし、それが複雜でない場合には、區別標識の確定によつて、容易に計量し得る。

これらは、人種・民種に關する客觀的記述ともいふべきものであつて、比較的主觀的色彩の混入し得ないところである。その形狀を圖表に表現し、その分布・人口を地圖上に記載することが可能である。

しかるに、人種・民種問題として理解せらるゝところは、かくのごとき客觀的なものではない。それは、著しく主觀的要素を含むものである。それは、人種・民種の價値問題に關係するので、その理解は複雜を極めると同時に、主觀的色彩を濃厚ならしめる。それは、人種的・民種的・差別感情に基礎を置くからである。この人種的・民種的・差別感情は、異質者に對する疎隔感情であり、同質者である人種・民種に對する血緣親和感情が基礎となつてゐるから、異質者と同質者とに對する評價を左右する力をもつてゐる。そこに、價値問題としての人種・民種問題の困難が横はつてゐる。

更に、人種・民種問題は、當然民族問題に關聯を持つ。ある論者にとつては、この問題は、一つである。しかしながら、この問題を、二つのものとして解釋するとしても、人種・民種が、民族の自然的基礎を形成する以上、無關聯ではあり得ない。たゞ、前者が自然的事實であるのに對して、後者が、歷史的社會的事實であることの認識が重要である。しかるに、論者は、この區別を識別しない場合が多い。そこに大きな混亂が惹起せらるゝ。即ち、民族は、人種・民種の生物的基盤の上に、ある歷史的段階にいたつて、始めて出現するといふ認識である。それは、

民族の近代性といふ言葉で表現されてゐる。この近代的民族現象と自然現象としての人種現象とは、近代民族が始めて、いはゆる全球世界を構成し、その民族的發展を全地球上に及ぼし、他の人種・民種に對して、征服・支配・交易の諸關係を設定したことによつて、二者を綜合したやうな形態となるに至つてゐる。そこに、人種・民種問題と民族問題との關係が錯綜し、その認識が困難化す原因が潜んでゐる。兩者は、別種の問題ではあるが、深く相關聯してゐる。この混同のために、多くの認識の誤謬が生れてゐる。われわれは、その深い關聯を認識しながら、兩者の意義を、それぞれの特質において、理解しなければならない。

二　人種主義の立場

近代における人種・民種問題とは、人種の特徴・分布・人口の客觀的記述を外にすれば、人種の價値問題である。こゝにいふ人種の價値とは、單に身體的遺傳特徴の形狀の整否・美醜をいふに止まらない。人種をもつて、歴史並に社會の最高動因と考へ、これによつて、人間社會・國家並にそれによる活動の價値が決定されるといふのである。一般に人種的社會觀といはれるものは、その基礎の上に立つてゐる。人種をもつて、世界を動かす基礎的動因と考へるのである。その見地に立つて、人種の動因としての力の問題が提起せられる。即ち、國家・社會の動因としての人種は、いかなる形態において、保持せらるゝことが、最上のものかの問題である。この問題は、人種の純血保持の問題として理解されてゐる。

人種問題を價値の問題として理解するものは、現在人種主義（Racialism）と呼ばれてゐる。この種の見解によれば、人種が社會的並に歴史的發展の根源であり、人間的集團の最高價値を占める。それは、人種至上主義である。この立場に立つものが、人種價値問題の最大多數を占めるものではないが、なほ多大の影響力を持つことは事實である。たゞ、この立場は、自己の所屬する人種または民種に對する絶對の價値評價の上に立つがゆゑに、純粋の客觀的立場を保持することが困難な場合がある。それは、自己人種または民種に對する絶對信念を持つ人によつて抱懷せられてゐるので、ときとして他人種・他民種に對する憎惡または低評價を、必然的に隨伴せしめる感情を伴ふことがある。さういふ信念から盲信にいたることによつて、最早客觀的論議を盡すことは不可能である。われわれは、それを批判の外に置くと同時に、この種の人種至上主義者も、それを自己の趣味または信仰として、學問圏内に入り來ることを、慎まなければならないであらう。學問的研究は、どこまでも客觀的なることを要するからである。

この種の人種論者ほど徹底的でないまでも、人種集團が歴史的・社會的過程において、重要性を持つことを認識する論者は多數である。いやしくも、社會的集團の生物的基礎を問題とする以上、その量の問題と同時に、質の問題が存することは、明瞭である。この質の問題において、同質的社會構成と異質的社會構成または、二つの基本社會的における異質的人的要素による關係の差異は、認識外に置かるゝものではない。前者は、社會構成民種の問題として、または階級の問題として理解せらるゝところである。少數民種問題（少數民族問題）が、これである。二つの基本社會間の問題は、一層明瞭な問題として理解されてゐる。たゞ、これらの問題において、單に構成資質として人種的要素を擧げるのみに滿足するものは、人種至上主義者であり、その他の政治・經濟・文化の諸要素をも、人種・民種の要素とともに、重要視し、または、その間に配列價値序列を求めようとするものは、その他の論者である。

けは、事實である。それが絶對的なものであるか否かが、人種主義としからざるものとの區別標識である。いま、わたくしは、その兩者の理論內容についての價値批判を、こゝに行ふといふのではない。その立場の差別を明瞭にして、以下の論述に役立たせようとするのみである。

いはゆる人種理論と稱せらるゝものは、現在においては、人種主義の理論である。その動向には、二つあると考へられる。

その第一は、フランス人ゴビノオの「人種不平等論」（一八五三年刊）であり、その通俗的祖述者であるフースト・チェンバアレンの「第十九世紀の基礎」である。この兩者は、別の機會において詳論したやうに、社會發展の唯一の動因を人種に求め、人種の價値が、人間集團の價値を決定する。從つて、人種質資の保持は人間集團としての國家・社會の最大必要であるといつてゐる。この理論的系統に屬するものが、現在の人種主義である。それは、ドイツのナチの人種理論に表現されてゐる。アルフレット・ローゼンベルク以下の論者は、これである。この人種主義の現實の形態は、アンチ・セミチズム（反ユダヤ主義）である。こゝでは、問題は、アリヤン民種かユダヤ民種かの形態において、取扱はれてをり、それが一國の政策にまで形成されてゐる。

その第二は、第一の人種主義（人種至上主義）に對して、人種鬪爭主義とも名づくべきものである。近代社會學におけるそれは、サン・シモンによつて提起されたものゝごとくであるが、現代社會學における人種鬪爭の立場は、ルドウィック・グンプロウィッによつて代表されてゐる。グンプロウィッは、文明史を諸種の要素の間における鬪爭と觀じてゐる。第一、人種的に異る原始的集團間の鬪爭、第二、弱小人種集團を征服し、服從せしめた強大人種集團によつて形成された國家間の鬪爭、第三に、この種の國家內部における階級の鬪爭が、これである。かれはダアウィンの適者生存說とスペンサアの進化の觀念に影響されてゐる。この鬪爭現象を第一位に置くグンプロウィッも、社會生活の第二義的要素として、異質結合と混成とを承認してゐる。異質結合は、自然的連帶の基礎であり、これによつて、個體が集團に自然的に參加するものである。混成は、長い鬪爭の後に、征服者と被征服者とが言語・宗教・經濟利益によつて、相互に結合する結果生ずる過程である。かくのごとく、グンプロウィッの立場は、人種主義のやうに、人種の價値を、最高のものとするのではない。かれは、人種的集團の鬪爭を自然的事實として、社會的進化の最大原因として認識しようとするものである。

この二つの立場は、人種を强調することにおいては、その規を一にしてゐる。しかしながら、ゴビノオーチェンバアレン說は、人種の價値、殊に一特定人種—アリヤン人種—の價値を强調する歷史哲學的立場を保持してゐる。これに對してグンプロウィッ說は、人種集團の鬪爭を强調する。そこには、特定人種の價値に關する認識または主張は存在してゐない。たゞ歷史並に社會の過程を人種集團の鬪爭として理解しようとすることに重點がある。

たゞ、人種主義の發展は、人種集團鬪爭說に近づきつゝある。それは特定人種の價値の高評價とその價値維持のための他人種排斥の主張および政策である。人種主義の主張によれば、人種の價値は、低劣人種との混交によつて低下する。この防衛のためには、それを排擊し、その混交を許さないことにある。現在人種主義の最も旺盛なドイツにおいては、人種防衛は、ユダヤ人の排擊にありとされてゐる。このアンチ・セミティズムは、一の人種鬪爭說と考へることが出來る。それは、人種鬪爭說の消極的一面に過ぎないものであるが、その點において、人種主義と人種鬪爭の社會學としてのグンプロウィッの說とは、一脈相通ずるものがある。しかし、その本質は異るものである。たゞ、わたくしは、現在の人種論考の出發點は、この兩者のいづれかに、その基礎を置くか、または、そのい

づれかに理論的基礎を借用してゐるものであることを示せばよいのである。わたくしの論述は、この兩者のいづれにも基礎を置くものではない。兩者は、ともに極端に人種的要素を過重視するの弊害に陷つてゐるからである。わたくしは、人種問題といはれる現象の存在を承認するとともに、その客觀的意義を、探ぐらうとする。

三　近代植民活動と人種問題

人種問題を、その正しい姿において把握しようとするならば、近代世界史の進行と併せ考へねばならない。人種問題も、世界史上の一つの問題であり、世界史の動きとともに、人種的接觸は多端化し、その意味は、明確化するに至つたからである。グンプロウィッツの主張するやうに、原始時代において、人種集團の鬪爭が行はれ、征服者と被征服者との關係が設置されたことも事實である。しかし、それは遠き昔の事實であり、かつ相接近してゐる人種・民種の場合が多かつたのである。勿論東洋人種のヨーロパ侵入のごとき、いはゆる民族大移動のごとき人種・民種の顯著な運動現象がなかつた譯ではない。しかし、近代世界史の發端から現在にいたる世界の動きには、世界の主要人種間の大規模の接觸が存してゐる。新大陸としての南北兩アメリカ並に陸路によつてのみ連絡し得たアジアが新しい航路の開拓によつて、東西兩洋接觸の中心點に置かれるに至つてゐる。この新しい事實は、近代世界史の成立によつてのみ可能となつたところであり、眞實の意味における人種問題の重要性の認識の基礎が出來上つたともいふべきであらう。

東西兩洋の連絡の遮斷を再開し、東洋の珍奇な貨物を獲得して、その商業的利益を計るといふのが、當時の第一の問題であつた。この問題の解決のためには、東洋への新しい通路の開拓が先決問題であつた。何となれば、一四五三年以降、東西兩洋の交通の要衝をなしてゐたコンスタンチープルは、オトマン・トルコ族のために占領せられ、オトマン・トルコ族は、この地において、兩洋の通路を切斷したからである。

通路開拓の努力は、三つの方面に行はれた。その第一は、古來からその可能性が論ぜられてゐたアフリカ南端を迂回する東洋航路である。第二は、北氷洋經由の東洋への通路である。その第三は、世界圓球說に基礎を置く西廻り東洋航路である。第一のアフリカ南端迂廻路は、ポルトガルの王子ドン・エンリック以來研究開拓に努力され來つたところである。第二の北氷洋經由路は、オランダ、イギリスの航海者によつて、開拓が努力された。この第二路は、海洋の危險多く、かつ氣候寒嚴のために、容易に開拓が進まず、現在のアルハンゲリスク附近に到着して、ロシア貿易の利益の多いために、ロシア貿易通路としてのみ役立つに過ぎなかつた。

第三の世界圓球說による西廻り東洋航路は、クリストファ・コロンブスによつて敢行せられ、一四九二年アメリカ新大陸の發見となつた。コロンブスは、新大陸をもつて、アジアの一部と認識して、その死に至るまで四回の渡航を行つたに拘らず、新大陸の發見を認識してゐない。後に新大陸の發見の事實が確認されたのである。第一路のアフリカ迂廻航路は、ヴァスコ・ダ・ガマによつて、一四九八年に開拓された。この二つの航路の開拓は、新時代の發端である。

この新時代を近代と稱するのであるが、この近代は、ヨーロッパ自體において、近代國家の生誕によつて、新しい社會構成を形成すると同時に、その世界開拓の可能性を生ぜしめ、世界の開拓によつて、近代社會は、一層の發展を期することが出來た。民族の近代的意味は、民族のこの時代における構成をいふのである。而して、近代國家は、民族國家として、この世界史的事業を遂行するに至つた。近代國家は民族國家として、世界史の推進機關となるに至つたが、世界開拓の過程において、異人種と接觸し、これを征服または懷柔する必要に會した。異人種の征

服・懐柔は、近代國家の榮養素としての富の獲得のために、缺くことの出來ないものであつた。そこに植民現象が發生する。

植民現象とは、ある領域において、政治經濟的利益を獲得するために、特殊の新關係を原住民に對して設定することである。植民者と原住民との關係は、原住民同志の關係によつて律せられるのでもなければ、また植民者の本國の關係を、そのまゝ植民地に移植するのでもない。それは、新しい一つの關係を設定するのである。その新しい關係は、植民者に都合よく、植民地の原住民には、眼新しいものであると同時に、利益を增進するものとは、考へ得ないものである。そこに、植民者と原住民との間に摩擦を發生せしめる原因となる。

この利益對立は、異人種によつて齎らされたものであるといふ事實は、原住民の間における異人種憎惡の感情を激發せしめる。單に異人種の接觸があるのみでは、異人種憎惡の感情にまで發展することはない。異人種の接觸は、その根柢に疎隔感情の存することは事實である。從つて、異人種接觸の當初において、相互に、警戒心を呼び起し、異人種を疎隔しようとする傾向の存することは否定し得ない。しかしながら、その接觸が、なんらかの意味において、その民種集團に利益を齎らすといふ場合には、この疎隔感情は、稍ゝ緩和せられる。そして、珍奇感情が、これに代る場合がある。この感情の變轉が、更に一轉するとき、そこには親和感情が生ずる。

植民關係の場合においては、その設定の當初において、これを嫌惡し、反射的反對行動としての暴動などが惹起されることが、しばしばであるが、その設定が、時間の經過によつて、原住民に習熟せられるに至ると、原住民はそれに適應するに至る。それは、恰度征服・被征服の關係が、長い時間の經過によつて、統治・被統治の關係として、一つの恒常的關係となり、被征服者の多くが、その中に安住し來ると同樣である。

かゝる植民關係の設定において、最もよく民族の問題、殊にその膨脹の問題と異人種の關係が存在する。それは、一大民族の側からみた人種問題である。この問題の激化と否とは、主動者である民族國家の政策の如何によるものであるが、植民關係においては、植民國の政治經濟的利益が主として考慮せられるがために、原住民の反射的反抗のあるのを常とし、異人種問題は、植民國並に原住民の兩者の側において、重大な問題として、考察される。

この場合、植民國においては、この問題は、民族の膨脹發展の問題として解され、原住者側においては、その居住領域の舊秩序の維持として問題となる。從つて、前者は積極的態度をもつて、新關係の設定に努力するのに對して、後者は、消極的に、新秩序の設定妨害運動を行ひ、原住民社會防衛の方策を考へる。その基本において、異人種問題が存在する。

而して、近代民族國家の膨脹欲求が大きければ、大きいほど、原住民に對する影響は大である。そこに、急激な植民的活動が行はれ、急速な富の集積が欲求せられるにおいては、原住民社會は、それだけ大きな影響を受ける。

近代植民活動の主要動機には、三つのものがある。而して、この三つは、相互に關聯してゐるものである。

第一、國家領域の擴大。民族國家は、その領域の擴大と人口の大量とを欲求する。それは、他の民族國家との鬪爭において、より大なる攻擊力と防衛力とを具備するためである。そのためには、領土の擴大を要求する。海路遙かに遠い植民地は、その領域と人口とにおいて、國家の防衛力を增加するものではないが、その一つは、攻擊力並に防衛力の基地としての任務を負はせ得るし、第二には、物資の獲得によつて、戰力を增强することが出來る。

第二、物資的利益の獲得。東洋植民地の設定の第一目的は、東洋の貨物を獲得することによつて、經濟的利益を

増進することである。ヴァスコ・ダ・ガマの艦隊の第一回インド航海は、その全費用を控除して、なほ原費用の六七十倍に達したといはれる。それほどの利益が擧らないにせよ、植民地貿易の利益の高いことは、當時の例であり、そのために、ますます植民開拓に拍車を懸けたことも事實である。植民地設定の中心課題は、こゝにあつたといひ得る。從つて、原住民に對しては、この見地から種々の政策が構成されてゐる。

第三、宗教的權威の擴大。近代初期においては、いまだ宗教の勢力は大きなものがあつた。この勢力と結合し、または自らこの勢力を形成することは、民族國家にとつての一大利益であつた。しかるに、キリスト教の教義においては、異邦民をその教に改宗せしめるのは、キリスト教徒の使命である。そして、世界的宗教としてのキリスト教を成立せしめねばならぬ。このことは同時に領土擴大並に貿易の利益と結合してゐた。殊に、近代初期において、舊教ゼスウィット宗團を利用したポルトガルにおいて、この傾向は顯著でゐつた。このために、貿易の利益を喪つたわが國の場合のごときがあつたとしても、インド方面においては、一つは原住民に對する政策として、二つには、インド在住のポルトガル人の統制機關として利用されたのである。

この三つの目的は、植民史家ケラアによつて、三つのCといはれてゐる。植民の目的は三つのCを達成することにある。三つのCとは、コソク・エスト・コンマアス・コンヴァジョンである。征服・商業・改宗が、これである。これらのことは均しく原住民の欲せざるところである。征服は、原住民の政治機構の破壞であり、商業は、その經濟機構の變改であり、改宗は、宗教の變更であつて、原始的原住民の最も好まないところである。原住民は、そこに異人種の自己の社會に對する攪亂活動を、そこに發見する。反射的反抗が發生することは、極めて自然である。その形態は、人種的對立である。植民者の國家においては、その中心的欲求が經濟にあるに拘らず、それを異人種または異教徒の問題として、とり上げる。さうすることによつて、國内輿論と政治的勢力とを動かすに容易となるからである。

この場合、植民者と原住民との兩者の間に起るものは、異人種蔑視の感情である。植民者は、原住民をもつて、野蠻蒙昧未開の民として蔑視し、その政策を强行することは、原住民を開明ならしめるもの、または神の惠みに浴さしめるものと考へ、原住民は、渡來の植民者をもつて、醜夷となし、花園を荒す亂暴者とする。前者は、神の意志によつて、世界を開拓するものをもつて任じ、後者は、自分の天地をもつて神國とする。この蔑視感情の對立が、武器の戰爭に進轉し、征服・被征服の關係を形成するか、または植民關係を設定するか、または原住民の反擊によつて植民者の敗退となるかである。そのいづれの場合にせよ、兩者の反目は、異人種的なものとして高潮する。

かゝるごとき人種的反目が解消せらるゝに至るのは、第一に、原住民が植民者の政策によつて、去勢せられ、全く新しい植民關係を天與のものとして受容するに至る場合か、または植民者が植民的關係の設立に失敗し、原住民の努力によつて、その原住民社會が、植民者來航當時よりも著しく進展し、植民者と同等の資格において政治經濟文化の諸關係を處理し得るに至る場合かである。この過程には、いろいろの段階があるが、原住民社會は、大體において、その民族國家を構成强化し、その近代化を完了するときにおいて、人種的蔑視感情は合理化せられ、それが全く消滅するに至るか、または民族的自負感情として更生せらるゝか、そのいづれかである。

四　スペインの新大陸植民と人種問題

コロンブスの發見した新大陸アメリカに早く植民したものは、コロンブスを援助したスペインの國民であつた。アメリカの發見が當時の人々に與へた興奮は、大きなものであつた。「ペルー征服」の著者プレスコトは、次のやう

に書いてゐる。

「アメリカの發見が當時ヨーロッパに與へた刺戟を理解することは容易でない。獲得されたのは、邊境の土地とか一地方または一王國の如く吝なものではなく、新世界がヨーロッパ人に投げ與へられたのである。珍奇な動物、豊富な鑛物資源、異る景觀、文化の度の異る人種等は人々の心を全く新しい觀念で充し、從來の考へ方を一變させて無數の臆測を生ぜしめた。新しい半球の神秘を探らんとする熱は甚だ高まり、移民は續々と洋上に運試しに出掛けたので、スペインの主要都市は、いはゞ人口減少を來たした。そこに展開されたのは、ロマンスの世界であつた。冒險者達は幸運であつたと否とに拘らず、歸國して報告する際に、その經驗をロマンスで潤色したので、國人の感じ易い想像力は、一層煽られ、當時の騎士道的妄想は一層拍車を掛けられた。彼等は熱心にアマゾンの話—昔の古い傳說がそのまゝ實現したと思はれた—やパタゴニアの巨人の物語に耳を傾け、砂か寶石で輝き、小鳥の卵程もある金の礫が河中から網で曳き上げられるエル・ドラドーの話を聞いて目を輝かせた。」（ブレスコット「ペルー征服」第二篇第一章）

そこには、黃金と珍奇の世界が展開してゐる。スペイン人は、こゝに植民した。當時のヨーロッパにおける黃金に對する熾烈な欲求は、國家の政策としても、マアカンティリズムを成立せしめてゐる。マアカンティリズムは、黃金政策ではなく、國民經濟形成政策であるといふグスタフ・シュモラアの說は、肯定せらるべきものだが、それは事象を、その本質において、把握したものであつて、當時の國家およびそれに屬する民衆の現象面においては、黃金の鄰きこそ、問題であつた。そのためにこそ、コロンブスは、大西洋を西航して、新大陸を發見しヴァスコ・ダ・ガマは、喜望峰を迂廻して、マラバァル海岸のカリアットに到着した。黃金・黃金の叫びが、新しい發見の努力に拍車をかけ、新世界の發見と新航海の開拓にいたらしめた。

スペインの植民活動は、王室經濟の豊富化が目的であり、消費經濟的な王室經濟にあつては、黃金の需要は無限であり、黃金の魅力は巨大であつた。從つて、王室は植民者に對して、黃金を大量に要求した。植民者も自己の利益と名譽とのために、中南米において、あらゆる努力と方法とをもつて、黃金獲得に熱中した。ブレスコットは、書いてゐる。

「遠征した軍人達の性格は、やゝ矯激な色彩を帶び、それは彼等の業績に反映した。運命を達觀し、自己の智略を確信し、傲慢且つ尊大な彼等は、如何なる危險をも惧れず、如何なる困難にも屈しなかつた。事實彼等にとつては、危險が大なるほど魅力があつた。激發されたその心は、益々反撥した。蓋し危險を伴はざる事業は行動に餘精力を打込ませるに必要な拍車を缺くものである。奇妙なことには、彼等の活動の動機は、氣高い考とともに卑しい考を含み、世俗的なものが、精神的需要と混合してゐた。行動の原動力は、黃金であり、報酬として望んだものも、また黃金であつた。彼等は執拗に黃金を追求して、手段のごときは殆んど考慮しなかつた。その勇散さは、殘忍性により汚された。この殘忍性は貪欲と—奇妙なことには—宗教とに基いてゐた。當時の所謂宗教とは、十字軍の宗教で、多くの衆惡の假面として便利至極なものであり、惡事を行つた者自身に惡事の意識を持たせなかつた。僞善を誇つたカステリア人は偶像崇拜の異教徒や狂信的な回教徒が行つた以上の殘酷さを宗教の名の下に平然と行つた。異教徒の焚殺は天の嘉し給ふ犧牲であり、死を免れた人間を改宗させることは、最も馬鹿げた惡行を贖ふて餘りあつた。最も頑迷なイントレランスの精神—國内では宗教裁判として、國外では十字軍として現れた精神—が地上に平和を、人間に仁愛を說いた宗教から生れたことを考へるとき、吾々は深い憂悶に閉

される。」（同上）

こゝでは、スペインの植民達達は、黄金を求めるために、神の名において、土着民の殺戮することを敢てしてゐる。かくのごときは、原住民としての異人種に對する態度として、最も徹底的である。その理由は、どこにあつた、か。スペインの植民者達は、その黄金を追求するに急であつた。そのためには、原住民の持つてゐる黄金を奪取するに越したことはない。そこに行はれたことは、奪掠經濟である。奪掠經濟は、再生產經濟ではない。經濟の再生產は、この場合考慮の外に置かれてゐる。從つて、土民の殺戮は、なんら今後の經濟に影響するところがない。さういふ見地に立つがゆゑに、スペインの植民者達は、力をもつて原住民の所有を奪つた。物を獲得する方法に、經濟的方法と政治的方法があるといはれてゐる。經濟的方法とは、なんらかの意味において、代償物を提供することである。政治的方法は、實力をもつて、物を取得する。この場合には、政治的方法が採用された。最も露骨な形態における植民的經濟關係が設定されたのである。

原住民の所有を奪つたスペイン人は、次に新大陸の埋藏資源に着眼してゐる。金銀鑛の開發が、これであるが、この場合にも、スペイン人は政治的方法によつてゐる。それは原住民の奴隷化である。奴隷勞働によつて、埋藏資源を開發し、最小の費用によつて最大の效果を擧げる努力をしてゐる。かくのごとく奪掠經濟と奴隷經濟とは、スペイン人の植民活動を貫いてゐる精神であり、植民地をして生產的ならしめなかつた最も大きな原因である。それは、スペイン人に近代の企業的精神の乏しかつたことを意味してゐる。しかも、それは、近代植民活動の中樞的方法である。たゞ、スペイン人は、あまりにも露骨にこの方法に依存し、その他の領域に進出した植民者が、さほどに露骨でなかつただけである。

五　アングロ・サクソンの植民と人種問題

スペイン人に續いて、アメリカ大陸に植民したものは、ブラジルの發見者としてのポルトガル人であり、更にイギリス人、フランス人などであつた。「ペルー征服」の著者プレスコトは、イギリス人の北米植民について、南歐人との對比において、次のやうにいつてゐる。

「後者（アングロ・サクソン族）の活動の根本をなしたものは、貪欲でもなく、また改宗といふ尤もらしい口實でもなく、實に獨立―宗教的並びに政治的獨立―の精神であつた。彼等は獨立を確保するため、困苦節約の生活で乏しい生計を營むことに甘んじた。土地から望んだものは、己の勞働に正當な報酬たけであつた。黄金の幻根がその行手にまやかしの足を投ずることなく、また血の海を通つて罪なき王朝の覆滅を驅ることもなかつた。彼等は社會制度が着實に進歩するだけで滿足した。幸棒強く荒野の缺乏に耐え、涙と額の汗で自由の木を育てたので、それは遂ひに深く根を下ろし、空高く枝を繁げりせた。」（同前）

この記述は、一部は眞實であるが、大きな誇張が含まれてゐる。アングロ・サクソン族が、北米の荒野に植民したことは事實である。かれらの先驅者ピリグリム・ファザアスが、メイ・フラワア號に乘船して、故國プリマスを出帆したのは、一六二〇年九月十六日のことであつた。かれらが新大陸において求めたところは、輝ける寶玉でも、海の幸でも、山の幸でも、戰爭の分捕品でもない。たゞ、信仰自由の殿堂であつた。純眞なこの移住者の間にも、故國に靜帆するメイ・フラワア號が岸邊を離れて、遠ざかり行くとともに、その日の糧の心配はあつた。かれらは困苦した。大地と力強く取組んでゐた。その點で、スペインの植民者達のやうなものではなかつた。しかしながらかれらの生活の要求は、原住民としてのインディヤン族との接觸を發生せしめ、その後の植民者の增加とともに、

植民地擴大の必要に會するや、これに反抗するインディヤン族を討伐してゐる。そこに異人種に對する植民者の態度がある。そこには、二つの問題があつた。

その第一は、いふまでもなく植民領域の擴大である。大西洋岸の小さな植民地は、その發展とともに奥地に處女地を求めて行く。そこは、インディヤン族の生活領域である。そこに領域攻防の闘爭が起つて來る。

その第二は、植民地における勞力の不足を充足する貯水池の役割を、原住民に果たさせることである。このことは、植民地としてのアメリカが發達するに及んで著しく要求されて來た。しかるに、アメリカ・インディヤン族は、それが農業的なものであつても、近代的勞働に適するものではなく、勞働を嫌惡した。そこで、アメリカ植民地においては、植民地の勞働力不足を充足するために、アフリカ大陸の黄金海岸におけるニグロ族を捕へて、奴隷化する方策を樹立した。近代奴隷制度の設定である。

この奴隷制度は、近代植民の一つの目的であり、ポルトガル人がアフリカ西岸の南下探檢の過程においても、黑奴を捕獲して、スペインの勞働不足地に供給してゐる。アメリカ大陸においても、この制度が發生し、原住民の奴隷化が企てられたのであるが、體力に虚弱であり、困苦の勞働に耐えないのであつた。この缺點を補ふものが、アフリカ黑奴である。アフリカ黑奴は、低劣な異人種として、人間として取扱はれず、役畜のごときものであつた。その奴隷貿易がいかに悲慘な物語に充ち、しかも利潤の高かつたものであるかは別問題として、黑奴奴隷は、新大陸における甘蔗並に棉花農業の基本勞働を形成してゐた。

この點において、スペイン人もアングロ・サクソン族も、植民地異人種に對する態度において異るところはない。スペイン人がメキシコ・ペルーにおいて殺戮の對象としたインカ族は、いまだスペイン人の奴隷ではなかつた。後に中南米へも黑奴奴隷が輸入せられるに至つたとき、スペイン人は、これを無意味に殺戮したであらうか。奴隷は生ける財産である。これを殺害することは、自己の財産を減少せしめることである。このことは、いかに無謀なスペイン人でも行はなかつたところであらう。まして、打算的なアングロ・サクソン族がこのことを行ふ筈がない。しかし、殺戮の對象としなにしろ、奴隷とすることは、異人種に對する耐え難い侮蔑であるし、また苦痛である。この點においては、スペイン人も、アングロ・サクソン族も、その異人種に對する態度において、大きな差異は存してゐない。而して、それは、異人種蔑視觀に根ざすとともに、政治經濟的利益に關して發生し來るものである。政治經濟的利益においては、同一民種内のそれぞれの社會層においても、異人種感情的なものが存在する。

スペイン人とアングロ・サクソン族との原住民に對する態度の大本は、同一であるが、兩者の異れる特質を指摘して置くことは無駄ではあるまい。それは、兩者の原住民との關係である。

スペイン人は、スペイン本國の人口の稀薄の事實と、植民活動の方法の殺伐性とによつて、婦人を本國から伴ふことが稀れであつた。それにかれらは、南國的熱情の所有者である。原住民の女子は、いたるところで、スペイン植民者の子を生むに至つてゐる。スペインの植民地においては、この種の混血者を多く發生せしめてゐる。現在のメキシコ人は、實にスペイン人と原住民の混血である。スペイン植民地の一の特徴である。この混血の結果、スペイン植民地においては、一の特定身分が生れてゐる。それはスペイン人と原住民の混血者であり、それがスペイン人と原住民との間の中間階級を構成してゐる。この傾向は、東印度における舊オランダ植民地にも、みることが出來る。

この點において、アングロ・サクソン族の原住民對處樣式は異つてゐる。かれらは、アメリカ大陸において、イ

ンティヤン族を討伐し、オーストラリアにおいて、原住民に殲滅的政策をとつた點において、スペイン人と同様であるが、かれらは、その植民地において、原住民の社會と別個の社會を形成してゐる。スペイン人が混血によつて、原住民社會に沒入に去つたのに對して、アングロ・サクソンは、原住民社會の外にあつて、原住民社會を支配してゐる。アングロ・サクソン族は、原住民と生活をともにしない。原住民婦人を通じての混血の結果を齎らしてゐない。原住民とアングロ・サクソンとは、明確に區別されてゐる。勿論、アングロ・サクソン族が、道德堅固のものであるか否かは、こゝでは問題ではない。かれらの植民地支配樣式として、混血の方法をとらないまでゞある。個々のアングロ・サクソンが原住民の女子といかなる關係に置かれようと、そのことは、一般的方式を左右してゐるほどのものではない。

原住民社會とアングロ・サクソン植民社會の明確な區別は、アングロ・サクソン族の植民の一特徴である。それが、かれらの帝國主義の一方法であり、植民地における權威維持の一方法であるとみることが出來る。その點において、アングロ・サクソンは、他人種に對する優越感情を懷いてゐるとみるにとが出來る。イギリスの紳士（ジェントルマン）なるものが、イギリスの指導者としての資格を持ち、その生活において、容易に他を容れないものがあるが、そのゼントルマンの樣式を、アングロ・サクソンは、その植民地全般に移して、これを異民種・異人種の支配樣式に摘用してゐる。

その根柢に横はるものは、アングロ・サクソンの優越感である。このことは、アングロ・サクソンの固有の精神ではない。かれらが、スペイン・オランダ・フランスとの闘爭において、近代世界史上において、世界的帝國建設の過程において獲得した感情である。而して、アングロ・サクソンはその帝國主義的活動の結果、自國の大をなしたところを、白人全般の世界征服として觀念せしめるために、「白人の負擔」（White mens burden）の思想を宣傳しつゝある。「白人の負擔」とは有色人の「文明化」をもつて、白人の恩惠と考へることである。有色人の領域と資源と産物とを支配し、これを歐米資本主義のために利用することが、「有色人の文明化」であり、「白人の負擔」である。しかも、この白人とは、アングロ・サクソンを意味する。アングロ・サクソンの優越性は、第十九世紀の初葉において成立し、第十九世紀を通じて發展し來つた英帝國とその版圖と勢力範圍とを保持するための理論であり、感情である。しかるに、アリアン人種の優秀性を說き、ゲルマン民種の卓越性を主張するゴビノオーチェンバァレンの人種理論は、勃興途上のドイツ帝國のための理論であつた。ナチ・ドイツは、再びこのゴビノオーチェンバァレン說を採用しつゝある。それは、アングロ・サクソンの辯護論に對して、宣傳論である。

六　植民と同化問題

植民活動において、採られた異人種對策の大要は、以上のごとくであるが、植民政策の上において、同化政策・協同政策・放任政策などといはれるものは、すべて、かくのごとき見地から觀察されねばならない。たとへば、同化政策が積極的に採用せらるゝにせよ、それは、植民本國と植民地とを全然同一の內容としようとするものではない。そこには依然として植民關係が存在して、この植民關係を既定の事實として同化政策を用ふに過ぎないものである。まづ植民關係の設定が基本的事實であり、この基本事實を前提として同化政策が採用される。スペイン人は、その植民地のいたるところにおいて、混血の事實を發生せしめてゐる。この混血の事實は、深い同化過程を示してゐるやうであるが、植民關係は、そのときにおいては、破壞されてゐない。たゞ、スペインの場合には、本國の政策と相俟つて、植民地における混血種族が多數を占め、かれらがなんら祖國感情を持ち合せてゐなかつたこと

によつて、植民國スペインが植民國として崩壞するに至つたまでゞある。

同化政策なるものは、植民國に對する植民地原住民の同化である。それは、經濟上の必要に促されてその方向を辿る場合が多い。ある植民地を、その本國の經濟的必要上、工業化する場合に、植民地原住民的無知識は、この過程に對する障害となつて現はれて來る。そのとき、これを教育によつて同化し、生活の多少の向上によつて同化することが行はれる。また政治上の考慮から、名目的形式的同化表現を與へることもあり得る。また生活上の同化作用は、本國の日用品市場を、こゝに擴大するために行はれる。アメリカの市場としてのフィリッピンのごときは、その代表的のものであらう。而して、その原住民の一部は、これをもつて、眞の同化と誤認してゐる場合がある。

アングロ・サクソンの場合は、極端な同化政策をとつてゐない。それは、アングロ・サクソンの活動に支障を齎らさない限りにおいて、寧ろ自由政策ともいふべきものを採つてゐる。しかし、部分的同化政策は、生活と經濟との同化において現はれてゐる。

植民國において、植民地に對して、全面的同化拒否の態度に出ることは出來ない。少くとも、植民國と植民地との間には、植民關係があり、それは、兩者の關係ではあるが、植民國が設定した關係であり、植民地の固有の狀態ではないからである。植民地は、かゝる設定された植民關係に、順應しなければならぬ。それは、植民國の對外政治活動への同化である。その點において、全面的同化拒否は、植民の當初における反射的反抗か、植民地における反亂の發生の場合であり、この反亂が成功して、植民關係を離脱するときである。

しかしながら、異人種の社會間における全面的關係設定拒否はあり得る。鎖國の場合のごときは、これである。中世の諸國は、概してかくのごとき狀態にあつたが、近代にいたるまで、この態度を採り來つたのは、支那と日本であつた。近代初期以來、ヨーロッパ勢力は、日本と支那に對して、幾度か、貿易關係の設定を要求した。兩國は、特定の場合、特定の國家に對しては、その要求を許容したのであるが、全般的には許容するところがなかつた。その理由は、異人種に對する反撥である。それは自主的社會において、無用の交渉を避けようとする廻避政策である。それは、自國の自立性に基礎を置き、その基礎においての經濟的宗教的政治的理由を持つものである。この場合、執拗に關係の設定を要求すれば、そこに攘夷運動が發生して來る。封鎖的自立的社會の一般的傾向として、自國の世界における最高地位の觀念が存してゐる。いはゆる中華思想が、これである。自國は中華であり、地大物博である。その狀態において、なんら外國異人種に負ふべきものがなく、全く自律の社會を形成し得る。この自律性を破壞しようとするものが、異人種であり、これを攘つことは、當然であると考へる。こゝに鎖國の政策がある。それは一つの他民種蔑視觀と自國の自律性に立脚するものである。

しかしながら、世界史の進展は、かくのごとき鎖國の可能性を奪ひ、中華思想を保持しながらも、その實力のないものは、植民地または半植民地の地位に至り、その金力の存在と、またはこれを育成し來つたところにおいては、民族國家の裝備が新しく行はれ、世界の政治經濟の舞臺において、一定の役割を演ずるに至つてゐる。

七　少數民種問題・移住問題

近代における人種問題の根柢が、新大陸の發見・東西全洋の接觸にあることは、以上のごとくであるが、世界は開拓せられ、その相互の關係が密接となつたにも拘らず、なほ今日においても、人種問題なるものは、消滅してゐない。その根柢は、近代世界史によつて規定せられた白色人種と有色人種との接觸交渉にあるが、兩者の關係の平等化または公平化は實現されず、從つて有色人種における平等公平の要求としての民族運動は、自治運動、または

民族國家建設運動の形態をとつてゐるが、それは著しく對外的對異人種的色彩を持つてゐる。一方民族主義の興隆に伴ひ、一民族國家内に包攝せらさだ少數民種が、自ら獨立の政治共同體組織（國家組織）を要求するか、または、包攝國家をして、民種の特殊集團なることを承認せしめ、その特殊集團の自治を獲得しようとする運動がある。それを少數民族（民種）問題といふ。それは、いはゆる民族自決の原則に基く要求であつて、民種的複合國家において起る現象である。

民種的複合國家における民種問題は、かくのごとく少數民種の側より起る要求と國家自體の側から起る要求がある。こゝに國家自體と稱するのは民種的複合國家にあつては、こゝにおける支配的民種を稱する。この支配的民種は、複合國家に形成せられた諸民種の綜合としての民族を支配するものであり、現實に國家そのものを動かしつゝあるものである。かゝる國家が、一旦國内的または國際的危機に際會するとき、國家的統制を強化するために、國家の見地から望ましからざる民種に對して、强制または彈壓を加へることがある。ナチ・ドイツにおけるユダヤ人問題のごときが、それである。このことは、國家の構成要素全體に對する統制强化政策の一部として行はれるところであるが、特定民種に對する彈壓を伴ふ點において、一の人種的問題として理解せられる。

この問題と關聯して理解さるべきものは、一國家に對する移住民問題である。殊に、異民種が、異民種の組織する國家へ移住しようとするとき、その數量の增加は、その國家に對して、ある程度の現狀を動かす要素となるかも知れない。かゝる不安は、移住し來る民種の生活・思想などが著しく異る場合に累加する傾向がある。從つて、かゝる移住を制限しようとする政策を、その國家において採用することはあり得る。この移住制限問題が、人種問題としての意義を持つ場合がある。

從つて現在の人種問題としては、次のごときものである。

第一　複合國家内における少數民種問題

（イ）少數民種の自治または獨立の要求

（ロ）國家による少數民種に對する統制の强化

第二　外國人移住問題

（イ）外國移民制限問題

（ロ）移民の同化問題

複合民種國家における少數民種問題は、植民地人種問題と異つてゐる。その相違點は、少數民種が、支配的民種その他とともに、同一の國家を構成しつゝある點にあり、その國家において特別待遇（自治）を獲得し、またはそれから離脱すること要求する點にある。植民地民種は、既に植民關係の設定によつて、本國の民種とは、異なる關係に置かれてゐる。この植民關係の改廢または獨立を主張する點において、少數民種問題と類似點を持つのであるが、それは國家自體の基本的構造に變化を與へるものではない。しかるに、少數民種の自治要求にせよ—獨立要求は勿論のことである—國家の基本構造に對して、重要な影響を與へるものである。この點において兩者の差異を發見し得る。

國家による少數民種に對する統制の强化は、二つの理由をもつものと考へられる。その第一は、統制を强化せられる少數民種が、その國家に對して、重大な損害または破壞的作用をなしつゝあると考へられる場合である。その第二は、國家が國内狀勢を考慮するために、少數民種の統制を强化し、その民種にある種の負擔を負はせることに

よつて、國民一般の安定感を獲得せしめようとする政略的なものである。少數民種の彈壓は多くの場合、この種のものである。從つて、それは人種問題の裝ひをもつ政治問題だといふべきである。

移民問題も、人種問題の一面を持つことは事實である。人種的感情がその根柢に有することは否定し得ないが、この問題が多くその國の勞働階級または勞働組合などによつて提起されてゐることは、それが勞働機會・勞賃などの問題であることを示してゐる。たゞ、それを一つの經濟問題として提起する場合においては、これによつて利益を受けるものもあり、かつ勞働階級または勞働組合の利己的立場を露骨に表現することゝなるために、一般的氣勢を煽るためには、人種問題として提起するの策術に出ることが、しばしばである。

八、北米合衆國の人種問題

移民問題としての人種問題と國内に少數民種を多く包擁する點において、顯著なものは、北米合衆國である。移民問題を人種的偏見によつて處理してゐるところに、南阿聯邦があり、オーストラリアがある。ともに白人主義を振りかざして、有色人移住禁止を行つてゐる。殊に白濠主義のオーストラリアにおいては、白色人種といへども、イギリス國籍以外の入國を拒否してゐる。この點は、ニュウジーランドも同樣である。それは、イギリス、アングロ・サクソンの極端な政策であつて、オーストラリア並にニュウジーツンド移住民およびその子孫の經濟的利己主義の露骨な表現である。

北米合衆國は、この點において、多少オーストラリアなどと相違してゐる。現在の北米合衆國は、各國人の入國に關して、過去の實績に對する比率をもつて割宛を行つてゐる。この割宛率は、アングロ・サクソンに最も有利であり、その他のいはゆる白色人種が、これに次ぎ最も不利を受けつゝあるものは、有色人種である。アメリカ合衆國における有色人種の排斥は、第十九世紀末葉における支那移民に對するそれをもつて始まる。更に進んで日本人移民排斥問題として、日米兩國の深甚の注意を喚起した。

北米における日本人移民は、まづハワイ群島に移住したものであるが、その勤勉は、雇傭者の好評を博し、徐々に大陸カリフォルニアに移り、主として農業勞働者として注目せらるゝに至つた。その勤勉は、白人農業勞働者に對して一敵國の觀があつた。勞働者階級または勞働組合が、かゝる經濟的理由から、その表面の理由としての非同化を口實として排斥運動を起したことに始まつてゐる。しかるに、日米兩國の政治關係は、日露爭を境界として著しく變つて來てゐる。日本の東亜における勢力の獲得に對して、合衆國は、穏かならざるものを感ずるに至つた。そこに一九〇五年以降の日本人排斥が惹起されてゐる。この問題は、爾來二十年、一九二四年における全面的排斥の政策が實現されるまで繼續されてゐる。從つて、人種問題としての日本人問題は、その内容においては、政治問題に對する一つのインデックス・ナンバアであつた。それは、日本に對するアメリカの攻勢の一部分と解釋せらるべきものである。從つて、東洋人排斥問題の發端をなした支那人問題も、支那が日本と戰鬪狀態に入り、重慶が合衆國とともに、對日戰爭に協力するや、合衆國における支那移民制限は解除されるに至つた。それは二つの實際的效果を持つてゐる。その一は、それによつて重慶に對する宥和政策を表現し得ることであり、その二は、現實的には、現在の場合如何に自由移住を許容するにもせよ、來航の自由を持合さないことである。かれらは、東洋人に對する蔑視感を持續しつゝ、なほ支那に對して、宥和政策のジェスチュアをなし得る所以である。それが、單なるジェスチュアに過ぎないことは、アメリカ合衆國の領土であり、その國民の一部であつたフィリッピン人に對してさへ、渡航制限政策をとつてゐたことで明白である。このことは、アメリカ人が、東洋人蔑視の現實を表視するものであ

る。それと同時に、政治的狀勢の如何に從つて、この感情を極端に利用しつゝあることを示すものである。

アメリカ合衆國の人種問題は、單に現在の移民問題のみではない。合衆國の構成全體が移住によつて出來よつてゐる。合衆國の現在の人口一億三千萬は、第十九世紀以來の移住によるところが最も大である。從つて、合衆國は、最も未成熟な民種複合國家である。殊に、白色・有色兩人種の寄合世帶である。有色人種としてのニグロ族は、同國の人口の一割を占めてゐる。この人種が、南北戰爭によつて、解放せらるゝまでは、奴隷であり、解放後においても、社會的には、最下級階級として、あらゆる壓迫を受けつゝあることは、事實である。しかも、この奴隷出身の社會層は、北米の原住民としてのアメリカ・インディヤン族よりは、生活的には強靱であり、人口の增殖において、大であり、その勞働力において、徐々に白人勞働者の領域を侵しつゝある。そこに、人種的問題を惹起する可能性がある。

合衆國の構成分子としての白色人種の間にも、幾つかの民種別がある。それは、それぞれ獨立の故國を持つことによつて、民種的感情とともに、政治的感情をも持つてゐる。そこに多くの問題が發生する。第一次ヨーロッパ戰爭當時のドイツ人問題のごときが、これである。それは民種と國家的利害を中心とする活動を喚起して、合衆國の統一を攪亂する結果となるに至つた。

そのために、合衆國においては、第一次ヨーロッパ戰爭後においては、一は經濟的考慮から、他は、政治的考慮から二つの政策を實行してゐた。それは、移民制限政策と米國化政策である。アメリカニゼーションは、統一的アメリカ民族を造出する政策である。寄合所帶を一つの家族的構成にまで高めようとするものである。このアメリカニゼーションの問題は、窮極において、アングロ・サクソン・アメリカを造出し、これによつて、アメリカ合衆國の傳統を維持すると同時に、國家の强靱性を增加しようとするものである。

アメリカ合衆國におけるユダヤ人は、第二十世紀に至つて急激に增加してゐる。第十九世紀において、最高五十萬の人口しかなかつたユダヤ人は、一九〇〇年始めて、百萬に達し、爾後十年毎に百萬を增加し、一九三三年には四百五十萬に達してゐるが、それは、資質において低劣と稱せられてゐる東方ユダヤ人（ロシア並にポーランド・ユダヤ人）の來住によるものとされてゐる。同時に、アメリカ金融界におけるユダヤ金融業者の勢力の增大があつた。この二つの問題、即ち低劣資質のユダヤ人の移住、並に經濟界におけるユダヤ勢力の增强が、アメリカにおけるユダヤ人排擊に運動を醸生しつゝあるが、いまだこの運動は、本格化されてゐない。またアメリカのやうに民種の坩堝といはれ、生活の機會の潤準なところにおいては、國內における强烈な人種問題は發生し得ないであらう。

九　ドイツの人種問題—ユダヤ人種問題

現在最も苛烈な人種問題として、また人種政策としてみるべきものは、ドイツにおけるユダヤ人問題であらう。元來ユダヤ人は、その國家崩壞以後約千數百年に亘つて、諸國を漂泊し、いたるところにおいて迫害の標的になつてゐる。この問題の解明のためには、たしかに數卷の書冊を必要とするであらう。しかも、この問題ほど、論議の多く複雜多岐なものもないであらう。それは、單に人種問題としてのみ取扱ふことは出來ない。それは、同時に宗教問題であり、經濟問題であり、社會問題である。而して、ユダヤ人問題は、世界における白色人種と有色人種との關係よりも、古く、ヨーロッパ諸國における人種問題の中樞點を形成してゐたかの觀があつた。白色・有色兩人種問題は、近代世界史の問題であるが、ユダヤ人問題は、古代・中世を通じ、近代史に及ぶ問題である。第十九世紀の中葉民族解放思想の普及化に乘じて、ヨーロッパ諸國において、政治的解放を獲得した後においても、ユダヤ

人問題は一層熾烈な形態において、存在してゐる。殊に、舊帝制ロシア並にドイツは、その中心地であつた。舊帝制ロシアにおけるアレキサンダア三世時代のユダヤ人迫害（ポグロム）は、苛烈なものがあり、深くユダヤ人の敵意を挑發してゐる。これらの事情と專制的政治形態の脆弱性とは、第一次ヨーロッパ戰爭を契機として、その末期に革命を勃發せしめ、ロシアはボリシェヴィキの支配するところとなつた。ボリシェヴィキ政府は、ユダヤ政府として批評されてゐる場合があるが、その當否は別問題として、その治下においては、苛烈であつたポグロムは終焉してゐる。從つて、ユダヤ人問題は、東歐から中歐地帶にその中心地帶が移つて來てゐる。

ドイツにおいては、第一次ヨーロッパ戰爭における敗北とその後の國內狀勢とによつて、ユダヤ人問題再燃の最良の條件の下に置かれたといつてよいであらう。この國內狀態を恒常的狀態に引きもどすためには、そこたなんらかの手懸がなければならぬ。その第一のものが、ユダヤ人問題であるといふことが出來るであらう。

ユダヤ人がヨーロッパ諸國において、迫害せられた理由を考察してみると、次のごときものをみることが出來る。

第一、人種的差異　ユダヤ人はセム人種に屬してゐて、ヨーロパの支配的人種であるラテン人種並にインド・ゲルマン人種としてのアリヤン人種と異つてゐる。そこに異人種感情の基礎がある。

第二、宗教的反目　ユダヤ人はキリスト教の反對者であり、キリストに十字架を背負はせたものである。古代・中世を通じて烈しい宗教的反感が、こゝから生れ、その傳統が近代ヨーロッパにも傳へられてゐる。

第三、社會的反感　ユダヤ人の一部が都市において金融業を營み、營利をこゝとしてゐる。このことを普遍化して、ユダヤ人の特性とし、いはゆるシャイロック的性格を作り上げてゐる。それは反社會的なものである。その反社會的なものには、二つのものがある。

（イ）シャイロック的經濟的反社會態度

（ロ）現狀を打破しようとする革命的精神の反社會性革命的精神としての反社會性は、近代のものである。

これらのユダヤ人に關する見解は、ユダヤ人に本質的なものか、または後天的なものかは問題である。反セミチズムの主張者は、ユダヤ人の本來の性格が、これらのいろいろの條件を作り出してゐるものとみてゐる。しからざるものは、これらの性格および、それによつて、行はれるとみられる諸條件は、ユダヤ人の被迫害の生活の中において、養はれたものとしてゐる。前者は本性論であり、後者は環境論である。わたくしは、いまこの問題について、そのいづれを採るべきかを斷定する必要がない。ユダヤ人問題の熱心な主張者は前者によつて、その理論を打ち建て、それを行動に移してゐるからである。

ドイツにおいて、ユダヤ人が政治的に解放せられたのは、第十九世紀の七十年代であるが、その後においても、ユダヤ人問題は提起されてをり、アンチ・セミチズムの運動は、ヘッセンを中心として行はれてゐた。思想的には、ゴビノオーチェンバァレンの人種理論によつて、アリヤン人種の優秀性が主張せられ、これとともに、オイゲン・デュウリングその他の反ユダヤ理論家が、アリヤンの優秀性とユダヤとの兩立しないことを主張するに至つたが、勃興當時のドイツにおいては、この問題はあまりに發展してゐない。

しかるに、第一次ヨーロッパ戰爭以後において、右翼方面において、この問題を提起して、ドイツの現狀の責任は、正にこゝに求むべしと主張するに至り、當時のドイツ國內狀勢とともに、この主張は漸次勢力を得來つた。いま、かゝる狀勢を招來したと考へられる諸條件をみれば、次のごときものであらう。

第一　第一次世界大戰におけるドイツの敗北
第二　戰爭の結果としての一般的窮乏
第三　戰爭成金輩出の中に、ユダヤ人成金の出現
第四　ワイマアル憲法の積極的デモクラシー、その起草者フゴウ・プロイスはユダヤ人である。
第五　社會民主黨の勢力獲得、共產黨の强化、從つて保守主義の沒落

これらの諸現象に對して、その原因のいづれにあるかを究めることは、容易なことではない。たゞ、甚だ簡單なことは、その責任者なるものを指摘して、それに一切の責任を負はしめることである。そして、右翼的論者の多くは、ユダヤ人を、その責任者として指摘した。このことは簡明でもあり、了解し易いことである。人種と教義と性格との異つてゐるユダヤ人が一切の責任を負ふべしとするのは、よく大衆の耳に入ることの出來る簡單な論議である。そこに、ユダヤ人問題は、擴大された規模において、再生產された。それは、時局に對するパナセアである。

一〇　ナチのユダヤ政策

ナチスは、ドイツ難局の原因のユダヤ人の工作にあることを指摘し、ユダヤ人を排擊することによつて、ドイツの國難を救濟し得ると主張することによつて、戰爭とインフレーションによつて沒落した中產階級の民心を獲得した。この地盤を基礎として、ナチスの政治工作は進められ、ユダヤ人排擊、ドイツ民族の統一の主張は、當時階級鬪爭の激化に恐怖してゐたドイツ大產業家の協力を獲得し、世界恐慌の荒波を突破するためには、獨裁形態の政治を要求するといふことに意見の一致をみ、一九三三年一月三十日ナチ黨のアドルフ・ヒットラアを首班とする右翼聯立內閣が形成さるゝに至つた。ヒットラアは、まづ政敵である共產黨と社會民主黨の勢力を彈壓し、右翼諸黨をナチ黨に改編して、一黨獨裁の形態を整へた。

この過程において、最も容易になし得ることは、ドイツ國內における六十萬弱のユダヤ人を排擊彈壓することである。このことは、大多數のドイツ人にとつては、寧ろ痛快なことであり、たゞ問題は國外から來る干涉の手のみであつたが、世界恐慌の最中にあつては、よくこのことをなし得る國家はなかつた。

從つて、ナチは、このユダヤ人政策は、次のごときものであつた。

第一　一切の政治的部面から締出して、その公民權を奪つた。
第二　職業からの一部の締出である。大學教授・記者・俳優・出版關係・官吏・商業の殆どすべての部門からユダヤを締出してゐる。
第三　ユダヤ人との混血禁止。ユダヤ人との婚姻禁止、四十五才以下のドイツ婦人のユダヤ人による雇傭禁止を行つてゐる。

その他、ユダヤ人に對するドイツ一般人のリンチ的彈壓は、數へきれないほど行はれ、一種のユダヤ人に對するテロリズムが行はれた觀があつた。而して、數萬のユダヤ人はドイツ國境を越へて、安住の地を求めてゐるのであるが、國外帶出通貨は僅少量に制限せられ、全く進退兩難の狀態に置かれた。これらの事例は、多く報告されてゐる。

わたくしは、この人種鬪爭ともいふべき光景に對して、その善惡利害を、こゝに判斷しようといふのではない。その原因の探究は、必要であるが、わたくしが先に擧げた第一次世界戰爭後の狀勢とドイツの復興の精神とを併せ考へるとき、かくのごとき手段も、一つの手段として、考へ得るものであることを認めようとするものである。

ドイツは、第一次世界大戰の敗北から起ち直らねばならない。しかるに、國內の狀勢は、國粹論者の主張する方

向に向ひてゐない。寧ろ反對の方向に向ひてゐる。從つて、ドイツの保守的復興のためには、荒療治を必要とする。そのための一つの手段が、ユダヤ人問題の提起である。

第一　ドイツ至上主義を強調するためには、ドイツの構成要素の純粹化を圖る必要があり、その阻害物としてのユダヤ人を排擊することを要する。

第二、窮乏化してゐたドイツに對しては、一般民衆の耐乏の精神を涵養せしめるために、最下級以下の階級または身分を創立することを要する。ユダヤ人をこの地位に置くことは、一石二鳥である。

第三　ドイツの戰後の窮乏と混亂の原因は、第一、國際資本主義、第二、國際共産黨にあり、兩者ともに、ユダヤ人の操作するところである。この兩者の勢力を彈壓しようとするならば、ユダヤ人の勢力を擊破することを要する。

更に、第二次ヨーロッパ戰爭の勃發、對ソ戰爭の開始、對米宣戰は、國際資本としてのユダヤ勢力の米英、國際共産黨勢力としてのユダヤ・ソ聯を擊つことである。

こゝに、ナチ黨結成當時から現在にいたるまでの反ユダヤ主義の主張が實現されたのである。勿論、反ユダヤ主義は、ナチの專賣ではない。それは、古い傳統を持つものである。ゴビノオ・チェンバアレンの人種理論を基礎として、アルフレット・ローゼンベルクがナチ理論を構成したといつてよいのであるが、その理論の價値は別問題として、この問題をして、世界的施風の一種としたのは、ドイツにおけるユダヤ人排擊の徹底的展開である。

この問題と對照して興味のある問題は、ドイツの再軍備準備時代から、ナチ・ドイツによつてとり上げられたドイツ國境外におけるドイツ人種の問題である。六百萬のドイツ人の構成するオーストリア、スデーテン地方に四百萬以上のドイツ人をもつチェッコ・スロヴァキア、百萬のドイツを住民とするポーランドの諸國をドイツは、相手として、少數民種問題としてのドイツ問題を解決しようとしたことである。

一見するところ、少數民種としてのユダヤ人の徹底的彈壓を實行しながら、他國領域における少數民種としてのドイツ人問題に干渉するのは、矛盾のやうであるが、ナチ・ドイツにとつては、このことは、少しも矛盾ではない。そこにドイツ民族の優秀性の理論が持ち出される。而して、優秀なドイツ民族を少數なりとも彈壓することこそ、問題であるといふ。オーストリアの併合は、一九三八年三月に行はれ、ズデーテン地方におけるドイツ問題は、同年九月、チェッコ・スロヴァキアの問題は、翌年四月ポーランドは同年九月に手をつけて、第二次ヨーロッパ戰爭に至つてゐる。

この戰爭の最大の原因は、この種の問題にあつたのではない。英獨、獨ソ聯のヨーロッパにおける爭覇戰であるが、人種問題解決を理由とすることが、戰爭の場合國內的に有利であるとともに、事實人種問題は存在した。そこに、戰爭の理由とする條件が備はつてゐた。

要するに人種問題なるものは、單獨に提起される問題ではない。その形態が、いかにも單獨であるかのごとき場合にも、それとともに解決すべき大きな問題が背後に控へてゐる。そこに人種問題の本質がある。

以上歷史的にみて來た人種問題の概觀は、われわれにそのことを明確に敎へてゐる。そこに民族問題と人種問題との差がある。民族問題においては、問題は單に、表面に附隨してゐる。それを認識出來ないのは、觀察者の認識不足である。しかるに、人種問題においては、問題は常に背後に潛んでゐる。よく認識力を活用し得ないものには、それも發見することの出來ないのである。